

# 学校は再開されたが・・・

日本経済新聞

2019年3月15日

困難な廃炉作業が続く東  
京電力福島第1原子力発電  
所（福島県双葉、大熊両町）  
から南に約10キロ。同県富岡  
町にある町立富岡第一、第  
二の2小学校の合同校舎  
（富岡校）を9月下旬に訪  
ねると、明るい声が耳に飛  
び込んできた。  
卒業式出席を控え、6  
年生が、お世話になった  
地域の人にお礼の手紙を書  
く活動の真っ最中。「あの  
人には私が書く」「この人  
にはおれが……」。笑顔が  
はじける。

**地元で7年ぶり**  
2校は事故後、避難先の  
同県三春町の仮校舎で運営  
していたが2018年4  
月、ほぼ7年ぶりに町内で  
再開した。児童数は計17人。  
6年生の児玉桃心さん（12）  
は避難先のいわき市からス  
クールタクシーで通う。「震  
災前の記憶はほとんどない  
けど、祖母や母が小学生時

## 福島5町村 再開小学校の児童数



合同校舎で一緒に授業を受ける、  
2年生（2月、福島県富岡町）

47%

# 避難長引き「戻れない」

校舎に約26人の児童が通  
う。富岡と三春の校舎をイ  
ンターネットをつなぎ授業  
を継続することもある。  
事故で全住民が避難した  
7町村（浪江、双葉、大熊  
市、福島市といった避難先  
と富岡町に住んでいた子供  
と仲良くなった」と関係が  
ない。

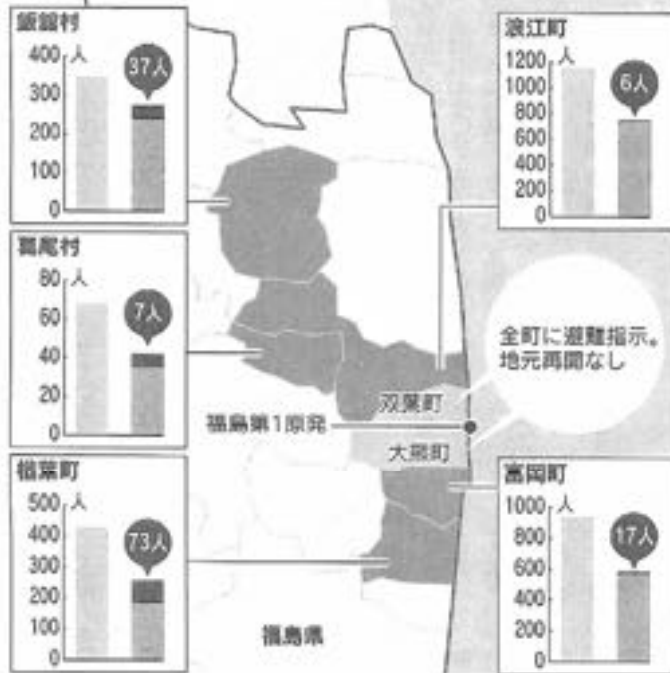
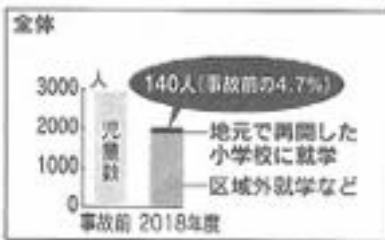
代を通じた富岡町で、自  
分も小学校に通いたかつ  
た」と喜ぶ。  
桃心さんのような子供は  
まだ少ない。三春町の校舎  
は今も存続。18年度は富岡  
事故前は14校、2941人  
自治体の学校に通うのは全体  
同小の児童会長、鈴木直  
輔（58）は説明する。町外か  
減少は、福島県の避難自治体  
に共通の悩みだ。一部が避  
難指示区域になった川俣町  
は18年度に町内で再開した  
ばかりの山本小の休校を  
決めた。

佐美さん（12）は父親が復  
員関連の仕事をしている関  
係で、18年にいわき市から  
富岡町へ越してきた。「最  
初は戸惑ったけど、みんな  
が、町外に避難中で入学が  
見込めない。校舎を改修し  
プールも新設したが休校が  
避けられなくなった。  
町教育委員会の担当者は  
「子育て中の町民世帯の生  
活基盤が避難先に移ってし  
まった」と話す。避難先の  
街の小学校に通い、友達も  
できると、やはり戻りづら  
くなる。

富岡一小的岩崎校長は  
「10年や20年で子供が戻る  
とは思っていない」と言っ  
た。同校では地元の人を講師に  
招いてのサッカー教室やア  
ユの稚魚放流などに取り組  
み、学習発表会として地域  
のお祭りで劇も上演する。  
目指すのは「コミュニティ  
の中心になる学校」だ。  
地方では、地域での小学  
校の存在感は都会以上に大  
きい。子供たちの元気な姿  
が増えれば町の再生にも弾  
みがつく。岩崎校長は「子  
供はもちろん、保護者にも  
通わせたい」と思ってもら  
えるようにしては」と学  
校づくりを力を注ぐ。

### 児童の就学状況

（原発事故で全住民が  
避難し、地元で学校を  
再開した5町村）



宮城県  
福島県

東日本大震災後の復興を  
データを糸口に検証する。